

RdRp summit と ViBioM2023 への参加報告

総合研究大学院大学 生命科学研究科 遺伝学専攻

脳機能研究室 五年一貫博士課程 5 年

西村 瑠佳

海外出張期間：2023 年 5 月 20 日～5 月 29 日

開催場所：スペイン バレンシア ADEIT

筆者はヨーロッパを中心に世界各国のウイルスを対象に生命情報科学研究を行う研究者の集まりである European Virus Bioinformatics Center (EVBC)の開催する 2023 年度の年会(ViBioM2023)とそれに付随して行われた RdRp Summit に参加した。本学会への参加目的は、口頭発表を行うことで自身の遂行する古代ウイルス研究を広く研究者に知ってもらうだけでなく、ウイルスの生命情報科学研究の最新の動向を知るためである。

RdRp Summit は今回が初めての開催となり、約 30 名の研究者が世界各国から集まり、2 日間に渡って実施された。RdRp とは RNA ウイルスが増殖するのに必要不可欠なタンパク質で、RNA ウイルスを探索・解析する上で非常に重要である。本研究会の開催によって RdRp 研究に携わる研究者同士で問題を共有し、RdRp をベースとした RNA ウイルス研究を発展させることを目的とした。研究会はプログラムの半分以上がグループワ



図 1 RdRp summit 参加者の集合写真

ークや全体でのディスカッションで構成され、様々なバックグラウンドの研究者と問題を共有し、解決策の提案を行うことができた。高度なディスカッションに尻込みする場面もあったが、専門知識のインプットとアウトプットを効率的に行うことができ、非常に良い経験となった。また、少人数での密なコミュニケーションの機会が多かったため、会の参加者の大半と顔見知りになることができた。

ViBioM2023 は ViBioM2022 が当初はスペインのバレンシアで行われる予定だったものの、オンラインに切り替えられたことからリベンジの意味を込め、バレンシアで対面形式にて開催された。上述の RdRp Summit に参加した研究者に加え、世界各国から合わせて 100 人程度の参加者が参加した。学会自体の規模はあまり

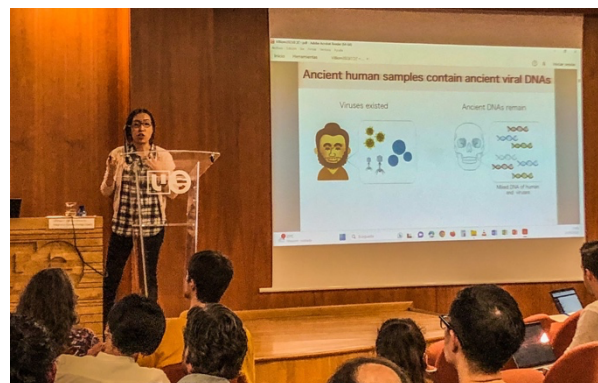


図 2 口頭発表を行う筆者

大きくはないが、数千人規模の巨大な学会に比べ、知らない相手でも気軽に話しかけられる点は非常に良かった。特に、コーヒースタンドや食事の時間を利用して様々な研究者に話しかけに行くことによって、自分の場合は会の参加前には 2, 3 人しかいなかった知り合いが、参加後には数十人以上に増えた。

筆者は古代人のゲノムデータ中に含まれる、古代のウイルスゲノムに関する解析

について英語で口頭発表を行った。日本列島における古代人をはじめ 300 を超えるゲノムデータから数万個以上の古代ウイルス配列を検出し、そのゲノムを特徴付けた結果を示し、それらのウイルスと古代人の生活との関連性や、ウイルスそのものの数千年にわたる進化に関して議論した。口頭発表中の質問に加え、発表後にも数人の研究者が直接質問をしに来てくださり、有意義なフィードバックをいただくことができた。特に、発表を通じて古代ウイルス研究で世界的にも有名な Terry C. Jones 教授とも知り合うことができたのは今後古代ウイルス研究を進める上でも非常に良い機会だった。

今回の学会はウイルス学研究の中でも生命情報科学を取り入れた研究を行う研究者が集うものであったため、発表の大半が自身の研究と非常に類似点の多いものであり、研究内容と手法ともに大変参考になった。例えば、多くの研究者が取り組むバイローム研究におけるウイルスの探索手法などは自身の研究にも応用できると考えられる。また、他の研究者のポスター発表でのディスカッションなどで得られた知見も大変参考になった。

最後に、今回得られた貴重な経験を今後の自身の研究に応用できたらと思う。今までに経験したことのないような国際学会における密なコミュニケーションやディスカッションを経験する機会を与えてくださった遺伝学専攻の旅費支援制度に感謝申し上げる。



図 3 懇親会での様子



図 4 会場近くの大聖堂。バレンシアには歴史的建造物が多い。



図 5 中央市場。他の研究者とお昼を食べに。